

「ピーチェック！」結果報告書



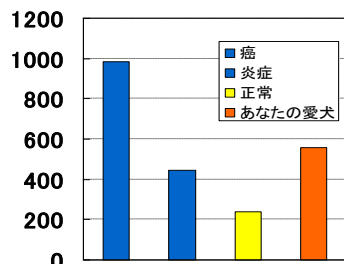
佐藤 マロン ちゃん (6歳)

採尿日: 2008年 10月 4日

あなたの愛犬の健康度



アセスミン検出量



状態	アセスミン検出量と疾患の関係
正常	健康な時には、アセスミンが増えることはありません。尿中からも微量しか検出されません。
炎症	炎症のために一時的に体内のアセスミン量が増え、尿中に排出されます。炎症が治まると排出量は減少します。
癌	癌の増殖に伴って大量のアセスミンが体内で作られ、尿中に排出され続けます。癌の進行に伴って検出量が増加して行きます。

項目	判定
アセスミン	C

(アセスミン判定基準)

A:良好です、B:健康に注意しましょう、C:疾患が疑われます、D:重大な疾患が疑われます

項目	今回の結果	参考基準値	項目説明	判定
尿pH	8.0	5.5-7.0	尿の酸性度を示す値です。疾患に関連して変動し、尿石症にも関係する指標です。	C
尿タンパク	(-)	(-)-(++)	腎臓の機能が低下すると検出されるようになります。尿の通り道の炎症でも検出されます。	A
尿潜血	(-)	(-)	腎臓や膀胱など、尿の通り道の障害を検出します。尿石症等では高値となります。	A
比重	1.020	1.015-1.050	腎臓で尿を濃縮する能力を反映します。腎臓病や糖尿病を含む重要な疾患の指標になります。	A
尿糖	(-)	(-)	糖尿病の重要な指標になります。大量に糖分を摂った場合にも一時的に上昇します。	A
ケトン体	(-)	(-)	メタボ状態の指標となります。脂肪の分解物が代謝されるとケトン体として尿中に排出されます。	A

(判定基準)A:良好です、B:やや基準値から外れます、C:疾患リスクが高まっています、D:疾患が疑われます

今回の検査では、アセスミンが健康な犬に比べて高めの値でした。アセスミンが検出される場合、飼い主様には見えないところに癌や炎症が起きている可能性があるため注意が必要です。また、尿pHが高い値を示したためにC判定となっています。尿pHが高くなると、尿石症のリスクが高まってくるのが知られています。アセスミンが検出されていますが、尿石症のリスクが高まっていることから、尿石症をきっかけとした膀胱炎による炎症の可能性も考えられます。食事や運動に気をつけながら経過を観察し、アセスミンや尿pHの値が正常にならない場合には、かかりつけの病院で診察してもらうことをお勧めします。糖尿病を含むその他の疾患については、今回の検査で異常は見つかりませんでした。

次回検査時期の目安: **3ヶ月以内** (最低でも年2回の検査をお勧めしています)